

令和4年9月30日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080014

氏名 後藤 恵

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先: 都市名 リスボン (国名 ポルトガル)
2. 研究課題名 (和文) : フェルナンド・ペソアの詩学における「異名」と劇の構造
3. 派遣期間: 令和3年9月10日 ~ 令和4年8月31日 (356日間)
4. 派遣先機関名・部局名: リスボン大学

5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先機関では受入研究者の António M. Feijó 教授の指導の下、ポルトガルのモダニズム詩人であるフェルナンド・ペソア(1888-1935)の研究を行った。Feijó 教授から必読文献の指示を受けそれらの文献の読みを進めるとともに、日本では入手が難しい文献収集を行った。また、Feijó 教授のペソアに関する授業のほか、以前教授より紹介を受けていた専門家らのペソアに関する授業や19世紀ポルトガル文学の授業をリスボン大学や新リスボン大学で聴講した。ペソアやペソアに大きな影響を与えたセザリオ・ヴェルデら19世紀の重要な作家のテキストを読んだ。

文献の精読を通して、ペソアと異名者の相違性に注目するというよりは、類似性に注目し異名者らによって構成される劇の不完全性を導いていくという筋道を立てることができた。とりわけ2021年に刊行されたリチャード・ゼニスによるペソアの評伝はペソアの創作活動の全体像をつかむうえで大きな助けとなった。ペソアのテキストには決定版と呼べるものがなくこれまでに複数の出版社からエディションが刊行されており現在も整理作業は進行中である。文学テキスト(主に詩)については、Imprensa Nacional-Casa da Moeda、Assírio&Alvim 社、Tinta da China 社から刊行されているエディションのうち未入手であったものを網羅的に収集した。先行研究に関しては、近年刊行されたものはリスボン市内の書店で購入した。出版から年数が経過しているものは図書館での複写となるが再編集され流通しているものも多い。例えばエドゥアルド・ロウレンソの著作は購入が難しかったがグルベンキアン財団から近年出版されている全集を購入できた。

6.研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し

先行研究をまとめたものを2022年3月に日本ポルトガル・ブラジル学会で口頭で発表した。今回の派遣で得られた成果については現在文章にまとめており、今後も教授の助言をいただきながら軌道修正を行い論文として提出する予定である。口頭発表については今年度中に国内の複数の学会で行う予定である。具体的には日本ポルトガル・ブラジル学会、東京外国語大学グローバル・スタディーズ学会が挙げられる。なお、すべての研究成果は2023年度中の提出を目処に作業を進めている博士論文に反映させる予定である。

今後の研究計画の方向性

今回の派遣を通して得られた筋道をより具体化させていくことが当面の課題となる。派遣先では詩よりも先行研究や文芸批評や評論や手紙などの散文テキストを優先的に読んだため、これらから示されたことが詩においてはどのように表れているかを分析していく必要がある。派遣以前は主要な3名の異名の関係性を分析することを考えていたが、ペソアと類似性がみられるアルヴァロ・デ・カンポスとベルナルド・ソアレスを中心に据えていくことを考えている。

並行して、欧米のモダニズムの潮流とポルトガル文学の潮流という2つの潮流のなかにペソアを置き、ペソアを相対的にとらえていく作業も進めていく。ポルトガル文学については19世紀の詩人であるアンテロ・デ・ケンタルとセザリオ・ヴェルデをとりあげペソアと比較することで各々の「形而上学的な詩」、「客観的な詩」としての側面がペソアに大きな影響を与えていることを導きだす。

7.本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ペソアの研究の中心地であるリスボンに身を置くことで多くの知見を得ることができた。2021年10月には4年に一度開催されるペソアに関する会議で最大級の会議である「フェルナンド・ペソア国際会議」に、2022年6月には国際研究チーム「エストラニャールペソア」が主催するセミナーに参加した。現在のペソアの研究を牽引する研究者らの発表を聞いたことは大きな刺激となった。また、複数の授業を聴講しじっくりとテキストを読むことにより自分がこれまで気づかなかった視点からの読みや重要な文献などを知ることができた。研究者間の共通認識や現地の研究者が今どのようなことに関心があるのかについては文献を読むだけでは分かりにくい部分が大きかったが、こうした会議や授業への参加を通して徐々に理解を深めることができた。加えて、ペソア記念館のほか、リスボン市内に点在するペソアが暮らした家々などゆかりの地を巡れたことも大変有意義であった。

また、今後日本で研究を進めていくうえでの視点について考えるうえでの長期的な課題を見出すことができた。ペソアにおいてはどのエディションに依拠していくかによって詩の解釈に差異が生じる場合があるが、原稿の読みや解釈についてはポルトガルの研究者の解釈に依存せざるを得ない側面が大きい。また、ペソアの研究は近年広がりを見せており国外の研究者との国内の研究者の共同研究も積極的におこなわれている一方でアジア圏の研究者は依然として極めて少ない状況にある。今後日本で研究を進めていくにあたり、外からペソアを研究する視点や着眼点について改めて考える必要性を感じた。